

職人

野生動物学研究室教授 高槻成紀

子供の頃、学校帰りに大工さんとか左官さんとかが仕事をしていると立ち止まって眺めたものだ。なんだか特別な技術をもっていて真剣に作業をしているのをあこがれるような気持ちで見ていたと思う。

大学博物館にいたときに展示のために職人さんが来てくれる。初老くらいのベテランが若い人に接するときの態度は驚くほど厳しいものだ。若者のほうは今風の長髪だったりするのだが、会話は最近では聞いたことがないほど礼儀正しいもので、なつかしいような、忘れていたものを聞いたような気がした。上司とか先輩とかいうことばはふさわしくなく、師匠などというのがふさわしいような感じだった。ベテランのほうをよりふさわしく「オヤジ」と呼ぶとすると、オヤジは圧倒的に力量が違う。若造はしたがって教えてもらいたいから真剣だ。オヤジの説明は説明になっていない。ごく短く

「そっちを引っ張れ！」

などという具合で、はたにはなんだかわけがわからない。

「それじゃ、高すぎんだろ！」

歯切れがよく、昔の落語の登場人物のようだ。「いやなら辞めろ」という雰囲気である。きびしい関係だが、私はそうした会話を聞くのが好きだった。よい伝統が引き継がれているのだなと思った。

麻布大学でも小規模な展示を始めて、マルモさんというほとんど個人経営のような小さ

な会社と仕事を始めた。とても良心的に仕事をする人で、あれこれ話し合いながら展示の内容を固めていくのもなかなか楽しい。こじんまりした展示なので私とマルモさんが話し合いながら進めているのだが、ときどきお雇いのように職人さんが来ることもある。今回の「手と足」展でも一度職人さんが二人来てくれた。初老という感じだった。一人はほとんどしゃべらない人、もう一人は軽い冗談を言いながら楽しんで仕事をするタイプの人と見受けた。仕事の手際がよく、材料の質などをみきわめて、決めると決然と道具を使う。この人たちも若かった頃、師匠にきびしく鍛えられたのだろうと思った。

展示は、できあがったものを見るのはもちろん楽しみだが、私は仕上げるまでの作業を見るのがとても好きだ。だんだんに形をなしていくのを見るのも楽しいし、専門家の技術を見るのも驚きの連続で楽しい。職人さんのもつ気持ちのよさについて、いろいろ思うことがある。

